

# 東京都 都立文化施設での多言語対応

- 都立文化施設（庭園美術館、江戸東京博物館、江戸東京たてもの園、東京都写真美術館、東京都現代美術館、東京都美術館、東京文化会館、東京芸術劇場）は展覧会だけで年間約500万人の来館者を集め、観光客等数多くの外国人が訪れる施設である。
- これまでも、パンフレットやホームページ、館内サイン、案内ボランティアなどの多言語対応（最低日英2カ国語、最大7カ国語）を図ってきた。
- 2020年東京五輪に向け、スマートフォンの多言語アプリによるガイドや、タッチパネルによる多言語解説の導入など、さらなる充実を図っていく。

## 対応例① パンフレットとホームページ

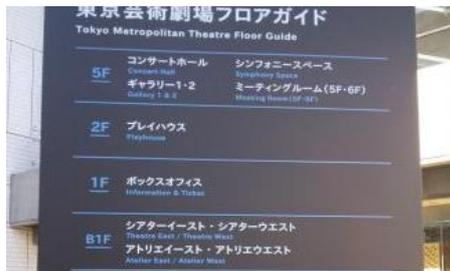


江戸東京博物館のパンフレットは日・英・中（簡体字・繁体字）・韓・仏・独・西の7カ国語版を館内とWEBで配布



東京都美術館のHPは日・英・中（簡体字及び繁体字）・韓の4カ国語に対応

## 対応例② 館内サインと案内ボランティア



各館の案内サインは基本的に日・英の2カ国語で表記（写真は東京芸術劇場）



江戸東京博物館常設展示では、案内ボランティアが7カ国語に対応

## 対応例③ タッチパネルとスマホアプリ



江戸東京博物館では、今年度の常設展リニューアルにおいて、多言語を選択できる解説パネルを導入



リニューアルした庭園美術館では、日・英2カ国語の解説アプリを導入（年度内に中・韓を追加予定）

こうした都立施設における取り組みのほか、東京都は、

- ① 首都圏の国公立民間の美術館・博物館館長による「美術館・博物館のネットワークに向けた意見交換会」

- ② 上野地区の主要文化施設が参加する

上野「文化の杜」新構想推進会議

における議論・呼びかけなどを通じて、他の文化施設の多言語対応についても推進していく